

『破天荒なジャック』

広都 悠里

9,998 文字

あらすじ

部活をやめてしまった僕、名前を呼ばれただけでびくつく元有名子役、受験を失敗した女装癖のある男子。お互いをコードネームで呼び合う訳ありな職場。この清掃バイトは心の掃除も兼ねた更生プランなのかもしれない。でも生きていれば汚れるのは仕方がない。だから今日もクリーンアップ、ゴー。

俺のことはジャックと呼んでくれ、といった男の本名は浜田長治で「どこかジャックだ、かすりもしないじゃねえか」と思ったが声には出さなかった。

ショッピングモールの清掃なんて絶対にしたくないバイトだ。

監督の紹介でなければ「夏休み限りの短期オーケー」でもやらなかっただろう。

「中村、このバイトはおまえに向いていると思う」

右肘をさす癖のついた僕に、いつもの威圧的な、けれどほんの少しの柔らかさを含んだ声で監督は言ったのだ。

「おまえになら、できる」

掃除くらいだれだってできるだろう。ただそれを選ぶかどうかの問題だ。退部届を出してしまった僕に監督命令を聞く義務はない。それでも「はい！」という返事ばかりしてきた僕に「肘故障して使いものにならなくなったからって清掃のバイトなんか紹介しているんじゃねーよ」なんて悪態をつけるはずもなかった。

「夏休み中は監督に紹介してもらったバイトに行く」

そう言うと親はあきらかにほっとした顔をした。

部活をやめてしまった僕が時間を持て余してぐずぐずになっていくより、バイトに行ってもらった方が安心だと思ったのだろう。

「そう。気分転換にいいかもね。どんなバイト？」

清掃業だと告げると「掃除？」と怪訝な顔をした。

「あれじゃないの？ 掃除と見せかけて実はどこかの筋肉を鍛える運動とか、すごい技が身につく、とか」

「映画の見過ぎだよ」

能天気な母親にイラっとした。

「もう、野球はやめたんだ。できないんだ」

「全然できないってわけじゃないし、楽しんでやるくらいは」

「楽しんでできるような甘いスポーツじゃないんだ」

軽い気持ちでボールを握ったりなんかできねえんだよそのぐらいのことがわかんねーのか、たたきつけるようにそう言ってやりたかった。

全力でできないんなら意味なんかないんだ！ 百かゼロなんだ！ そして今、僕はゼロなんだよと叫び、地べたを駆けまわり、うおうおうと喉を傷めるほど吠えて泣きじゃくりたかった。十二歳であればできただろう。でも、十七歳という年齢でそれをするのは難しい。無言で足音荒く自分の部屋に閉じこもる、その時の僕にできることはそれぐらいしかなかった。

そうして今、浜田長治の耳の上あたりにかろうじて白髪が少し残っているだけの照りつやのいい頭を眺めながら「就業に関する説明事項」を聞いている。

「で、名前は何だったっけ？」

「中村です」

「コードネームはどうする？」

「はい？」

「コードネームだ。さっき言っただろう？ 俺のコードネームはジャック」

不思議なことに、いくらおかしいと思っても、相手が当然のように言えばなんとか

合わそうとしてしまう。それは和を重んじる国、日本に生まれ育ったせいなのか、部活で「はい！」「ありがとうございます！」ばかりを言い過ぎてきたせいなのか、もともとの性格なのかはわからないが、気がついたら「ジェームズでお願いします」と返事をしていた。

コードネームって何だよ？マジかよ。

「オーケー、ジェームズ。今日はシュガーが君についてくれる。これに着替えて」

なんだよこれ、じいさんの妄想にどこまでつき合えばいいんだ？戸惑う間もなく作業着を渡され、ロッカールームに案内された。

グレーの作業着に着替えながら、どうして監督はこんないかれた老人と知り合いなんだと考える。

こんな場所で夏休みのほとんどが費やされると思ったらやりきれない気がした。

じゃあ、掃除の手順を教えます、と現れたのは僕と同じグレーの作業着を着たスレンダーな女性だった。ショートカットの黒い髪、小さな顔の中に小さな鼻と小さな口、細い眉、なんだかすべてが小さく頼りなく見えて、大丈夫なのかと不安になった。

「中村です。よろしくお願いします」

頭を下げると平坦な声で「シュガーです。よろしくお願いします」と返された。

この職場にまともな人はいないのかとおじけずいている僕に軍手、洗剤の入ったスプレー、雑巾、コードレス掃除機、こてのようなへらを押し付けると「行きます」とショッピングモールの通路に出る扉を開ける。

慌ててシュガーを真似て作業着の腰についているベルトにスプレーや雑巾をぶらさげ、へらを後ろポケットに突っこんで後に続く。

「クリーンアップ！ゴー！」

ジャックの声に押されるように、まぶしいくらいに明るいフロアへ出た。

「何なんですか、あの人は」

「ジャックは責任者ですけど」

「そういう意味じゃなくて、コードネームとかさっきの掛け声とか、変わっているっていうか、変じゃ」

「まず、掃除機をかけます」

僕の質問を遮るように、シュガーはいきなり掃除を始めた。

「手すりは汚れていないと思っても必ず拭くこと、お客様の邪魔をしないこと、お客様がいて掃除できない場所は後回しにすること、雨の日は床が濡れていることが多いからこまめにふきとること、お客様が滑って転んだりしたらうちの責任問題になりますから気を付けて下さい。ゴミの回収も行います。あとでゴミの収集場を教えます」

「さっき渡された、へらみたいなものは何に使うんですか？」

「剥がしです。ガムやシールなどの粘着性があるものを、はがす時に使います」

はいつくばって他人の吐き捨てたガムを引っぺがしている姿を想像すると、うんざりした。

「そんなことまでしなきゃいけないなんて大変ですね」

シュガーの白くて細い指と小さく整った横顔を見ながら、もっと楽で華やかな仕事がいっぱいありそうなのに、どうしてこんな仕事を選んだのかと不思議に思う。

「基本ひとりツーフロア担当になります。隅々まで掃除機をかけ、気になる汚れを発見したらその都度拭いてください」

歩きながら淡々と説明を続ける。彼女は僕の顔を全然見ない。嫌われているのかな。ほぼ初対面なのに嫌われるなんて第一印象がよほど悪かったのだろうか。

ウィーンと掃除機をかけながらシュガーは移動していく。

「雑巾に除菌アルコールを軽くスプレーして手すりを拭いて。落ちているごみは拾って」

「ごみ？」

「そこに、透明なフィルムが落ちているでしょう」

シュガーの指したところをよくよく見ると三センチ四方の透明なぴらぴらしたものが落ちていた。

「よくわかりますね。普通に歩いていたら、こんなの絶対にわかりませんよ」

愛想よく言ったらぴしゃりと返された。

「普通に歩かないで」

「え」

「仕事の目でちゃんと見て」

「はい」

シュガーのくせにまるで甘くない。

「これからの時間は館内での飲食者が増えるから、ごみが増えます」

時間は十一時を少し回ったところだった。僕とシュガーが回っているのは一階と二階だ。イートインスペースがあるのは四階だから僕らにはあまり関係ないな、と思ったがそうでもなかった。どの階にだって飲食物のこぼれは発生する。

東にジュースを噴射させた幼児がいればかけつけ、西にフライドポテトをこぼした客がいれば回収し、床の油分を拭きとる。

「どうしてみんなちゃんと座って食べないんだ」

シュガーの後をついて回りながら怒りたくなるが、テイクアウトという手法がある以上仕方がない。

一通り作業が終わって事務室に戻ると腰がだるくなっていた。

ジャックはお昼ごはんを買いに行ったらしく不在で、テーブル席で作業着姿の白髪頭の男性がカップみそ汁をすすりながらおにぎりを食べていた。

「おつかれさまです」

「おつかれさまです」

「お昼は外で食べてもいいんだけど、その場合は着替えてね。このままの格好でうろろしていると仕事をさぼっているとか、隣に座られて不愉快だって苦情が入ったりするから」

シュガーの言葉に驚いた。

「え？ そんなことをわざわざ言うてくる人がいるんですか？」

「そうなの、いるの！ 清掃業イコール汚い、ってイメージなんでしょうね。ジュースを買うだけなのに凄い顔してアタシの後ろに並ぶのをやめたお婆さん、いたし。そんなに汚いか？ つーか、あんたたちが汚したところをこっちは掃除しているだけだつー

の」

明るい大きな声で僕らの会話に割り込んできたのは、ピンクの唇をした目の大きな女の子だった。

脱いだグレーのキャップからばさりと金色の髪がこぼれ、細い指でくしゃくしゃと髪をかき交ぜるのを目で追った。

「ソルトです。よろしく。あっちのおっさんはブルース」

きれいなカーブを描いた眉と、まばたきするたびに音がしそうな睫毛にどぎまぎする。

「……ジェームズです」

スパイごっこは続行らしい。いい歳をした大人が何をやっているんだか。

「ジェームズ・ボンド？」

ソルトが笑う。

「ちなみにブルースはブルース・リーからとったらしいよ」

「ブルース・リー？ ブルース・ウィルスじゃないんですか？」

「年代を考えればわかるだろう？」

しゃがれ声でそう言うとブルースは持っていたおにぎりにかぶりついた。

ソルトは「シュ^{砂糖}ガーがいるならソ^塩ルト」というノリでコードネームを付けたらしい。

「じゃあ、僕もペッパーにすれば良かったです」

ふふふ、つやつやぷるぷるのピンクの唇で笑ってくれるとこちらの顔もほころぶ。

「にやにやしない。もう本当に男ってバカ」

シュガーが冷たい目で僕とソルトを見た。

「可哀相だから早めに教えてあげれば？ ジェームズは現役高校生なんだから」

「えー、高校生なの？ どうりで若いと思ったあ」

「あの、教えるって、何を、ですか」

「まだ教えてあげない」

ソルトの甘い声を遮るようにシュガーがきっぱりと言う。

「ソルトは男だから」

ぎょっとしてソルトの顔から腰のあたりまで思わず見てしまう。確かに、言われてみれば胸は平坦に近く、腰回りも女の子のボディラインにしてはウエストのくびれが感じられないような気がするが、だぼっとした作業着の上からではよくわからない。

「あ、やーらしい目で見てる」

両手を胸の前で交差させる仕草は女子っぽく、僕は目をうろろうらせて「すみません」とあやまった。

「なんでバラしちゃうの、まだ楽しめたのに！」

「あなたのお楽しみにはつき合えません」

僕は異常に塩辛い何かを食べさせられたような気分になった。しょっぱいよ、ソルト。まさか男だなんて。

よく見ればたしかに、大きくはないが喉仏がある。

「ジェームズ、お昼ご飯って持ってきた？」

「いえ」

「じゃあ、一緒に食べに行こう」

「はい」

見た目は女性で実は男性であるソルトと出かけるのに抵抗がなかったわけではないが、一応先輩だし、バイト一日目から逆らうのは得策ではないと着替えて廊下に出た。

デニムに白いTシャツ、その上にふわりと長めのチェックのシャツを羽織った姿は女の子にしか見えない。

「さ、行こう。って言っても上のフロアに行くだけですけどね」

腕を取られてぎくしゃくする僕に体を密着させて「年下の男の子っていいわあ」と完全に面白がっている。

「ちょ、くっつき過ぎです」

「えーダメなの？」

「ダメです」

学校の奴らにこんなところを見られたら、と思うと冷汗が出た。

「つまんなーい」

お昼ピークの時間をはずした十三時半だが、平日なのに夏休みのせいか人が多い。

「もうすぐブルースがごみ収集に来るよ。あのひとだけ休憩時間が違うの」

「ブルースさんは、この階の担当なんですか」

「コードネームに「さん」はいらんよ。ブルースはうちらの中で一番の古株、ベテランなの」

僕たちは「早い安い」の牛丼を注文した。

「力仕事だからお腹すくよね。その割には時給安いけど」

そう言いながら食べ始めたソルトに「いつからこのバイトを始めたんですか」と聞いた。

「んーと、春から。大学受験失敗してどうしようかなって考えていたら高校の先生が紹介してくれた」

ってことは僕より二つ年上だ。

「なんで、この職場はコードネームなんですか」

「面白いからいいじゃない」

「仕事だから面白くなくてもいいじゃないですか」

「遊び心のない子ね」

しゃべりながらもソルトは既に完食、僕も慌てて頬張る。

「あ、ブルースが来た」

ブルースはテーブルを拭いて回り、置きっぱなしのトレーを回収し、使用済みの台拭きを新しいものと交換していく。ゆっくり静かにフロアを歩き、ゴミをすばやく箒で塵取りに収納していくブルースを目で追った。素早い動きで目立たない。さすがプロだ。

食器を返却し「午後にもまたトイレ掃除がある」と聞いてがっくりする。

ゴム手袋をはめて直接便器に手を突っ込んで掃除をするのに抵抗がないわけがな

い。この職種に人気がないのも若者が来ないのもよくわかる。

「トイレが一番汚れるところだから、こまめに掃除するの。まあ、そのうち慣れるって」
ソルトと並んで通路へ出た、その時だった。

「誰か、捕まえて！」

女性の声がフロアに響いた。

一階から六階まで吹き抜けのショッピングモールの中に声が反響し、モール中の人間がびくっと一瞬動きを止めた。

ざわつく中に耳元で「二階だ」と男の声がして、下を見ると黒っぽい服を着た男が、エスカレーターをすごい勢いでかけ降りて行くのが見えた。

「わたしのかばんー！」

二階のフロアの端っこで身を乗り出して絶叫するおばさん。

エスカレーターにいるひとたちはあっけにとられてぶつからないよう身をよじり、走っていく男をただ見送るばかりだ。

「ドロボー！」

叫ぶ男の声があまりにも近くて「誰だ」と振り返ると声の主は他ならぬソルトで、地声はやっぱり男の声なんだ、さっきまでの会話の声は作った声か、すげえなど忙しい頭の片隅で思いながら逃げる男の方に視線を戻す。

とりあえず走行阻止、と思わず腕を振り上げたが、投げるものが何もない。ボールでもあれば体に当ててやれるのに。

「どうしよう」

おろおろするうちにも男は一階に到達、このままじゃ逃げられる。

「あ、ジャック」

いつの間にかジャックが一階のフロアにいた。買い物をしていたらしくレジ袋を下げている。

「ジャック！ その男、捕まえてー！」

ジャックがこちらを見た。ソルトの指す方向を見て事態を理解したらしい。

だが、ジャックは老人だ。男の方に少し走っただけでもう息切れしたらしく、立ち止まって ござござと手元のレジ袋の中を探りだした。

何をやっているんだよ、ジジイ見損なったぞ、と苛立って「ジャック！」と、思わず大声をあげた。

その時だ。

ジャックの手から男の足元めがけて黄色いものが発射された。

むにゆるん。

「ぐあっ」

男は叫び声とともに見事にすっころんだ。

「やった！」

ソルトといっしょに「すみません、すみません」と叫びながら身をくねらせてエスカレーターを下り一階のフロアにたどり付くと、白いぴかぴかのフロアの上で起きあがろうとしては滑り、わめき声をあげながらべちゃばた音を立てている男の方に駆け寄った。

ジャックは男を目がけ、さらにもりもりと黄色いものを噴射し続けていた。

すでに人だかりができて男は完全に見世物状態だ。人混みをかきわけ、警備員が来るのが見えた。ジャックの手には空に近いマヨネーズの大きな容器が握られている。

「あのマヨネーズ、ビッグサイズじゃん。いくらなんでもかけすぎじゃない？」

女性的な声に戻ったソルトは「すぐに戻って作業着に着替えて来なきゃ」と僕を小突いた。

「マヨネーズって油分たっぷり、掃除が面倒！」

ジャックが傍らに転がっているバックを拾い上げ、駆けつけたおばさんに渡しているのがちらりと見えた。

マヨネーズで捕まるなんて最悪で最高だな。

事務室に戻る途中で、バケツとモップを持った早足のシュガーとすれ違う。

「サインボード持ってきて」

「了解」

「サインボード？」

「これを持って行って」

折り畳み式の黄色いプラスチック板をソルトに渡され抱えると「走らないでよ」と念を押された。

お客様の安全第一。ぶつかったり不安や不快を感じさせてはいけません。楽しくゆったりお買い物。それがショッピングモールです。

「はい」

一階のフロアへ行くと「組み立ててそこらへんに置いて」とシュガーに言われ「ただいま清掃中。足元にお気をつけください」と表示された黄色いサインボードを組み立てた。ぐるりと配置してから、中を振り返る。

「こりゃ酷いね。とりあえず、掬い取った方が早いな」

ブルースが雑巾を片手に、かがみこんだ。

「はい、追加の雑巾と、ビニール袋到着。ジェームズ、マヨネーズを踏まないで。手間が倍になるから」

ソルトに言われ慌てて足元を見る。

「す、すみません」

「雑巾で靴の裏を拭いて、これをゴミ捨て場に置いたら事務室に戻って」

シュガーにマヨネーズまみれの雑巾が入ったビニール袋を渡される。

言われた通りにして事務室に戻ると、すぐにみんなが戻ってきた。

「え？ もう終わりですか」

「素早くきれいに、それがプロ」

ブルースが親指を立てた。

「午後の掃除を始めます」

シュガーが僕を振り返る。

「行くわよ。トイレ掃除」

そこからですか。

どうか落とし物や置き土産がありませんように、げんなりしながら後に行く。

「どんなに汚したってすぐにきれいにできるさ。だって俺達は全員、プロなんだから」
終わりのミーティングで胸を張って言いきったジャックにみんなは呆れた。
「マヨネーズ一本は多すぎるんじゃないか」
ブルースがしゃがれ声を張り上げた。
「食べ物は大切にすべきだ」
「まあ、丸く収まったんだからいいじゃないか。これも皆さんの協力のおかげです。ありがとうございます！ ありがとう、サンキュー」
大きな声でお礼を言ってひとりで拍手する。
「ジャックってけっこう破天荒だから」
シュガーは肩をすくめて出て行った。
「まあ、終わりよければすべてよし、ですかねえ」
そう言ってソルトは「じゃあまた明日」と手を振った。
ぽかんと残された僕の隣で「破天荒すぎるだろう」思いがけずぼそりとブルースがつぶやき、吹き出した。

ポリッシャーをかけたあとのフロアはつるりとした清潔な光を放っていて、広々さっぱりした床に寝転がり「うーん」と伸びをしたい衝動に駆られる。
「さっき、下を見ていたでしょう。うっとりした顔で床やガラス窓を眺めるの、やめてよ」
入ってきたソルトに笑われる。
「いいじゃないか。自覚が出てきた証拠だ。今日もよろしく」
ジャックはいつものように「クリーンアップ、ゴー」と僕たちを送りだした。
慣れとは恐ろしい。
もうコードネームで呼び合うことも、ジャックのアメリカンな「クリーンアップ！ ゴー」の掛け声にも違和感を感じなくなっている。
そして仕事に慣れるに従って、仕事以外の場所でもゴミや汚れが目につくようになった。
僕は目を伏せてやり過ごす。やり始めたらきりがなく、以前ご飯を食べに入った店で気になるところをうっかり拭いてしまい、バイトの女の子が店主に「いい加減な仕事をしている証拠だ」と怒られてしまったことがあるからだ。自分のテリトリー外で余計なことをしてはいけないと学んだ。

その日、仕事が終わってから珍しくソルトと夕ご飯を外へ食べに行った。
「勤務地以外でいっしょにいるってしんせーん」
身をくねらせるソルトに顔をしかめたが、以前のような抵抗は感じない。
おまたせしました、注文していたかつ丼セットがテーブルの上に置かれる。
いただきます、と手を合わせ、上下に割り箸を割るソルトの姿にきちんとした家へ育ったのかな、と思う。
そんな家でこの姿のソルトはどうなんだろう。しょっぱい存在なのかもな。実はそれもあつての自虐コードネームだったりして。

「あ、キャベツにマヨネーズがかかかっていなくてよかった。あれからマヨネーズがちょっと嫌なんだよね」

「あれから、ってジャックがひったくりを捕まえた時のことですか」

「なかなかハードだったよね。あれだけ盛大に床を汚されるなんて特大のゲロリンぐらだから」

「ゲロリン……？」

「あ、食事中ごめん。それはそうとジェームズって野球少年なの？」

いきなりの質問にソースがドボボと出てしまい、慌てた。

「当たっちゃった？ 恐ろしく日焼けしているし、その坊主頭を見れば誰でもすぐわかると思うけど」

「肘を痛めてやめたんです」

野球、という単語を聞いただけで、バットにボールがヒットした時の涼やかな音が聞こえた気がした。ど真ん中に当たった時の手から腕、身体へと伝わってくる確かな手応え。ボールの勢いを飛距離に変えて青空へ放つ感覚。

忘れていたはずなのに、忘れたいの、体がまだ記憶している。

不意に臉が熱くなった。

「もうやらないの？」

首を横に振る。

「ふーん」

ソルトはそれ以上何も聞いてこなかった。もはやソースの味しかしないどんかつを、もそもそ食べる。気まずい。

「なんでうちの職場はコードネームなんですか？」

話題を変えようと聞いてみた。

「本名で呼んでほしくない人がいるからじゃないの？」

「へ？」

思わず間抜けな声が出た。

「そんな理由でそこまでしますか？」

「だってジャックだもん」

平然とソルトは答える。

「苗字でもダメってことですか？」

「っていうか、ジェームズは気がついてないの？ シュガーのこと」

「シュガーのこと？」

「本名は沢井めぐみ」

「沢井めぐみってあの有名な子役タレントの沢井めぐみですか」

沢井めぐみは子供らしくない落ち着きと表情、奇妙な存在感で十年前ぐらいに大人気になった子役タレントだ。年下の僕が言うのも変だが、最近見かけなくなったと思ったらあんなに大きくなっていたのか。

「人前に出たくないからこの仕事を選んだって聞いたよ。芸名を使っていれば「人違いです」ってしらを切ることもできただろうにね。沢井さん、って呼んだだけでびくついていたみたいだから、それならいっそ、全員コードネームにしちゃえてジャックが言い

出してみたい。ジャックってぶっとんでるよね」

前は教えてくれなかったのに今日は教えてくれるんだ。それは仲間だと認めてくれたからなんだろうか。

ソルトの今日の唇はオレンジ色で、口元に運ばれたキャベツの薄緑色の効果で鮮やかに光る。

「あのう、いつから化粧をするようになったんですか？ このバイトって高校の先生の紹介だって言っていましたよね」

「メイクと、バイトの紹介って何か関係があるの？」

首を傾げながらソルトはとんかつにからしを付ける。

「高校の時からメイクをしていた、んじゃないくて高校の時からメイクをされていたの」

僕は口に運ぼうとしていたとんかつを落としそうになった。

『していた』んじゃないくて『されていた』？

学生服のソルトが派手なギャル同級生に囲まれて無理やりメイクをされ「超似合うじゃん」「イケてる、イケてる」と手を叩き大爆笑されている姿を思い浮かべて拳が震えた。

「ん？ どうした？」

「誰か、止めてくれなかったんですか」

ソルトの長い睫毛で囲まれた目が丸くなる。

「もし同じクラスにいたら、止めました」

「あ」

今の発言で意味を理解したらしいソルトは両手で口元を覆った。その肩が小刻みに震えている。

きゅっと目を閉じたその顔に胸が痛くなった。

「ごめーん。ひょっとして苛め的なものを想像しちゃった？ 違うから。仲がよかった女の子達がふざけてメイクをしてくれて、それからやみつきになっちゃったの」

手を放した顔が笑っていて、滲みかけた涙が止まった。

「でも嬉しかった」

身を乗り出してソルトが言う。

「お礼にキスしたいぐらい」

思わず反射的に腕で口元を防御した。

「もう。冗談に決まっているじゃない。別に男が好きなわけじゃないんだから」

「そうなんですか」

防御したまま、聞き返す。

「それに、少なくとも年下の坊主にはときめかない」

ああ、そうですか。年下の坊主で悪かったですね。でも、僕の推理は当たっているんじゃないのか。

部活をやめてしまった僕、名前をよばれただけでびくつく元有名子役、受験を失敗した女装癖のある男子。

「もしかしてこのバイトって、訳ありの人達ばかりを集めているんでしょうか」

あり得ない話じゃない。目立たず他人と話さず黙々と汚れを落とし、ついでに心もび

かぴかになるという安易な更生プラン。

「だとしたら何？ そういうの、どうでも良くない？ きれいに磨いたフロアだって人が通れば汚れるんだよ？ 生きていれば何かあるって。悩みのない人間なんかいないんだから」

ソルトが笑い出す。

「掃除で更生って意味わかんない」

言われてみれば確かにそんなことはどうでもいい。

というより、気がついてしまった。

つまり僕は自分が更生する必要があると思っているんだ。それってつまり。

右肘をさすりながら泣きそうになる。

まだ野球がしたい。

「あーなんかもう自分にポリッシャーをかけたい」

自分にポリッシャーをかけて、汚れみたいにはりついた余分な気持ちをがじゅがじゅとそぎ落として、まっさらにしたい。

くすぶり続ける思いから、目を背けていただけなんだ。

あきらめが悪くてもいいんじゃないか。まだ何かできるんじゃないのか。

「あれはぴかぴかになって気持ちがいいよね。そういえばジャックって、ポリッシャーかけの名人なんだ」

「破天荒なジャックになりたい」

必死で冗談を言ったのに、ソルトは「からしをぶちまけないでよ」と真顔で言った。

クリーンアップ！ ゴー！ ジャックの声が頭の中で響いた。